

他者意識と自己意識からみる大学生の友人関係

学校教育専攻
教育臨床コース
篠原 茜

指導教官 田中 雄三

1. 研究の目的

従来、青年期理解においては、人格共鳴や同一視をもたらすような深い友人関係を持つことを通して、新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進される時期であるとされてきた。しかし近年、その友人関係の在り方に変化が見られ、現代青年の友人関係の希薄さや対人スキルの不足、例えば、自己内省の乏しさ、内面的な関わりを避け、表面的な楽しさを求める傾向などが指摘されている。

青年期にとって、自己を内省して確立していくことと他者を意識すること、そして友人関係を築くということは、それぞれが重要であると考えられる。そこで本研究では、青年期に当たる大学生の他者意識と自己意識が、どのように友人関係に影響を及ぼしているか、また、他者意識と自己意識の程度によって友人関係にどのような特徴が見出されるかを検討することを目的とする。

2. 研究の対象・方法

大学生 175 名を対象に、質問紙調査を実施した。実施期間は、2002 年 6 月中旬から同年 7 月上旬である。質問紙は、他者意識を測定する尺度として「他者意識尺度 (辻 1993)」, 自己意識を測定する尺度として「自己意識尺度 (辻 1993)」, 友人関係を測定する尺度として「友人関係尺度 (小塩 1998)」を用いた。

3. 結果

他者意識尺度の因子分析を行ったところ、「内的他者意識」「外的他者意識」「空想的他者意識」の 3 因子が抽出された。自己意識尺度の因子分析を行ったところ「公的自己意識」「私的自己意識」「社会不安」の 3 因子が抽出された。友人関係尺度の因子分析を行ったところ、「気遣い」「大人の付き合い」「楽しさ追求」「集団志向」の 4 因子が抽出された。また、各尺度について男女比較をしたところ、他者意識も自己意識も女子の方が男子よりも有意に高い傾向が見られた ($p < .10$)。自己意識の下位尺度の「公的自己意識」は、女子の方が男子よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。友人関係尺度においては、男女差は見られなかった。他者意識尺度、自己意識尺度、友人関係尺度の 3 つの尺度について、尺度間相関を見た。その後重回帰分析を行った結果は次の通りであった。①他者意識と「公的自己意識」が強くなるほど、友人関係尺度と「気遣い」因子に強い影響を与えていた。②「私的自己意識」が強くなるほど「大人の付き合い」因子に強い影響を与えていた。③他者意識が強くなるほど、そして「社会不安」が弱くなるほど「楽しさ追求」因子に強く影響を与えていた。④他者意識と自己意識が強くなるほど「集団志向」因子に強い影響を与えていた。

また、他者意識も自己意識も高い群は、他者意識も自己意識も低い群よりも、友人関係尺度の

「友人関係全体」, 「気遣い」因子「楽しさ追求」因子においては有意に得点が高かった($p < .01$)。

「大人の付き合い」因子については, 他者意識も自己意識も高い群は, 他者意識も自己意識も低い群よりも, 有意に得点が高い傾向が見られた($p < .10$)。

4. 考察

友人関係の因子分析において, 先行研究では, 互いに内面的に深く関わり合う従来の青年期特有の特徴と, 内面的な関わりを避け表面的で誰とでもうまくやっつけていこうとする現代青年に見られる特徴がどちらも見出されていたが, 本研究においては, 全体としては現代青年に見られる特徴を呈しているように思われた。この理由として, 本研究の対象が同一の教育大学に在籍し等質性が高いことや教員を目指すものとして集団とうまくやっつけていこうとする人が多かったものと考えられた。

他者意識は, 女子の方が男子よりも他人への関心が高い傾向にあるという結果が導き出された。自己意識も女子の方が男子より高い傾向にあり, 中でも他者から見られる自分について, 女子の方が関心を持ちやすいことが示された。友人関係は, 先行研究では, 女子の方が友人に対して自己開示などの期待が大きいことや, より情緒的な関わりを求めるなどの差が見出されていたが, 本研究では男女差が見られなかった。これは, 因子構造が男女差を見出しにくいものであったことや, 対象の等質性などが考えられる。

友人関係全体と「気遣い」因子には, 他者意識と「公的自己意識」が影響を与えていた。このことは, 他者に関心を向けて, 相手との関係を円滑にこなしていこうとする姿勢と同時に, 相手から見られる自分も重要であると考えていることを示していると考えられる。「大人の付き合い

い」因子には「私的自己意識」が影響を与えていた。このことから, 自己内省に基づく相手に対する気遣いと, 相手の領分に踏み込まないという現代大学生の友人との距離の取り方が示されたと思われる。「楽しさ追求」因子には, 他者意識と「社会不安」の低さが影響を与えていた。このことは, 友人についての関心が高く, 新しい場面とすぐになじめるなど, 人と関わろうとする姿勢が積極的な形で出たものではないかと思われた。「集団志向」因子には, 他者意識と自己意識が影響を与えていた。青年の内省の乏しさや, 深刻さを回避し楽しさを求め, いつも友人と一緒にしようとしている傾向など, 先行研究との一致が見られた。

他者意識, 自己意識が両方高い人は, 相手がどう思うかを気にし, その場の雰囲気を使い, 相手を楽しませようとする行動を積極的にする。同時に, 相手を尊重するような心理的距離をとり, 相手に対して気遣いもみせるといった傾向も見られるのではないだろうか。

他者意識, 自己意識が両方低い人は, 自己や他者に関する洞察が少ないため, 自分が集団の中でどんな位置づけにあるか, 相手はどう思うだろうかなどと, 気を回すことをそれほどしないのではないかとと思われる。

5. 結語

今後の課題として①対象を増やすこと, ②他者意識と自己意識が強い相関を持っているので, 両者を操作的に区別しうるような尺度の開発, ③現代青年の友人関係を検討するにあたり, 自己・他者の視点だけでなく, 文化的・社会的背景も視野に入れた研究が必要である, という3点が残された。今後この点を検討していきたい。